

# 2022年度・海外学校教育実地研究〈イギリス・ロンドン〉報告

魚山 秀介・荒巻 恵子

帝京大学大学院教職研究科

## 1. はじめに

今回の本研修は、2020年2月に実施してからコロナ禍で中断を余儀なくされて以来、3年ぶりの実施（引率教員2名、SL6名、SM3名、教員2名の計13名参加）となった。なお、これまではイギリスの帝京大学の関連施設（帝京大学ダラムキャンパス及び帝京ロンドン学園）を利用して実施していたが、航空機チケット代金やその他の経費高騰などの要因から、帝京ロンドン学園での宿泊のみをベースとした4泊6日（従来はダラム、ロンドン7泊9日）に圧縮した日程を組んでの実施となった。（表1参照）

さらに前回との大きな違いは、昨年2022年2月に勃発したロシアによるウクライナ侵攻によって往路の羽田発航空機はロシア上空を通過するルートから北極海ルート、復路のロンドン発航空機は南回りでのルート採用によって所用時間が約2、3時間増えての移動となった。

また、イギリスではウクライナ状況の悪化によって小麦や原油価格が高騰して記録的な物価上昇が続いており、渡英直前の2023年2月1日には過去10年間で最大規模のストライキが発生して大英博物館や救急車、一部の学校までもが運営を停止するという異常事態にあった。一刻も早くこの戦闘状況が収束して、平和で安心な状況に戻って欲しいとの思いをあらたにした。

上述したように今回の研修は、多くの困難を乗り越えての3年ぶり実施となったが、特に参加者は大学からの援助によって食事代を含む宿泊費、また帝京ロンドン学園の御好意によって移動の際の学園バス代金の費用負担無しで研修が可能となった。あらためて関係各位、特に八王子キャンパス・教務グループ・高橋かおるさん、粕谷哉子さん、経理グループ・出口恵梨さん、国際交流センター・塩見亮太さ

ん、そして訪問校の斡旋、通訳を担当してくれた私の帝京ロンドン学園時代の教え子である衛川邦英さん、ロンドン市内研修に同行してもらった帝京ロンドン学園教諭・乳井雅裕さんには特に感謝の意を表したい。

## 2. 2022年度の実施状況

### (1) 訪問校

到着翌日、ロンドン市郊外イーリングにあるHorsenden Primary Schoolを訪問した。前回の2020年2月に視察した際、コロナの影響で授業見学が急遽、キャンセルとなったが今回は可能となり、エマ校長への事前質問に対する質疑応答も含めて参加者にとって有意義な訪問となった。エマ校長には前任のWest Acton Primary School校長の時代から本研修でお世話になっており、30歳代半ばで初めて校長となった極めて優秀な女性教員で、特に参加した女性の現職教員にとってロールモデルとなる人物であるように感じた。

その後、隣接しているMandeville School（特別支援）を今回、初めて訪問した。2022年9月に私が下見に行った際、Mandeville School視察へのハードルが高く苦慮していたがエマ校長が直接、先方の校長に視察を依頼することでようやく許可を得ることが可能となった。当日、私自身は緊張しながら学校に入ったが、予想以上に教職員の方々からフレンドリーな雰囲気や質疑応答や授業見学に応じてくれたので、参加した院生たち、特に特別支援学校所属の現職教員は多くの刺激や学びを得ることができた。

翌日の午後、ロンドン日本人学校を訪問した。佐藤雅彦校長から海外における日本人学校の運営について説明を頂き、各クラスの授業、及び施設見学を

おこなった。その後、森下理香教頭、関根彰子先生から事前質問に対する回答、日本とイギリスとの教育をそのように活かしながらロンドン日本人学校を運営しているか、特に PSHE (Personal, Social and Health Education) の視点から詳細な説明を聞くことが可能となり、とても有益な研修であった。

表 1 2022 年度の日程表

月日	予定
2/ 8 水	羽田発→ヒースロー着 (BA006)
2/ 9 木	① Horsenden Primary School 視察 ② Mandeville School (特別支援) 視察
2/10 金	午前 ロンドン市内社会教育施設 (教材研究 1)・視察 午後 ③ ロンドン日本人学校・視察
2/11 土	ロンドン市内社会教育施設 (教材研究 2)・視察 (アビーロード、ビッグベン、ロンドン塔、グリニッジ、ミュージカル鑑賞レ・ミゼラブルなど)
2/12 日	ヒースロー→羽田着 (BA007)
2/13 月	帰国 →羽田

なお、今回の研修では日程の都合で宿泊先の帝京ロンドン学園及び ISCA (International School of Creative Arts) の授業見学は残念ながらできなかった。しかし、特に帝京ロンドン学園は昨年 2022 年 12 月に国際バカロレア・ディプロマプログラム (IBDP) 認定校となったのでネルソン文子校長からその概略について説明を聞く機会を設定した。

私がこれまで 2 度赴任した帝京ロンドン学園は 1989 年に創立された私立在外教育施設であり、現在、欧州には本学園以外に立教英国学院 (1972 年創立)、スイス公文学園 (1990 年創立) の二つの私立在外教育施設が存続している。かつてはイギリス国内だけでも英国四天王寺学園 (1993 年閉校) や英国暁星国際学園 (2003 年閉校)、その他の国ではアルザス成城学園 (2005 年閉校)、駿台アイルランド国際学校 (2005 年閉校)、東海大学付属デンマーク校 (2008 年閉校)、ドイツ桐蔭学園 (2012 年閉校)、フランス甲南学園 (2013 年閉校) などの日本人私立学校が相次いで設立された。まさに、日本経済のバブル及びその後の衰退と連動することになり、戦後教育史においても注目すべき時期であると認識し

ている。

## (2) 事前・事後学習

本実地研究は 2 単位全 15 回の選択授業であるので第 1 回目講義として 2022 年 10 月 24 日 (月) 5 時限目に最初の説明会を実施して概要説明や訪問校の分担を決定した。第 2 回目講義である 11 月 28 日 (月) 5 時限目には、イギリス教育制度の概要や訪問校への事前質問内容の取りまとめ、報告会の段取り、本教職大学院年報における研修報告の記載の方法などについて説明をおこなった。出国前最後の第 3 回目講義である 2 月 6 日 (月) 5 時限目には最終確認をおこない、第 4 回目から 14 回講義を現地での視察とし、帰国後の 2 月 27 日 (月) 3 時限目に第 15 回目の講義として報告会を実施した。

## 3. ロンドン市内社会教育施設 (教材研究)

各学校訪問の内容の詳細については後半の報告に記載されているので確認頂き、本稿ではロンドン市内社会教育施設 (教材研究) の内容と意義について述べてみたい。

3 日目の 2 月 10 日 (金) 午前中、J.K.Rowling (1965 年生まれ) による小説・映画『ハリー・ポッター』で有名になった Kings Cross 駅構内にある「9・3/4 番線」へ行った。私自身は上記の作者と同年齢で、最初の帝京ロンドン学園への赴任時期 (1992 年～94 年) とほぼ同期に彼女が生活保護を受給して『賢者の石』を執筆していたことを思い起こしながら、院生たちが「9・3/4 番線」で記念撮影をして無邪気に喜ぶ姿を見て感無量であった。

その後、Kings Cross 駅に隣接している大陸間高速鉄道・ユーロスターの始発駅で 1868 年に開業した St Pancras 駅に移動し、荘厳なヴィクトリア朝ネオ・ゴシック朝建築の駅建物を目の前にして大英帝国時代の名残を体感することが可能となった。ちなみに、1994 年のユーロスター開業当初から 2007 年の始発駅は Kings Cross 駅ではなく、市内南部に位置する Waterloo 駅であった。Waterloo という名称は、1815 年 6 月にイギリス軍司令官ウェリントンがナポレオン 1 世を破った「ワーテルローの戦い」の英語読みであり、イギリスと大陸のフランスとの

関係を象徴する駅名でもあった。また、ロンドンで上映中の ABBA ミュージカル『マンマミーア』の1曲である「Waterloo」の歌詞にもその意味が含まれている。

そして、Kings Cross 駅から地下鉄で Russell Squar 駅まで移動後、徒歩で大英博物館に行った。通常、古代エジプトの神聖文字（ヒエログリフ）解読の契機となった「ロゼッタ・ストーン」の見学からスタートするがいつもの定位置ではなく、特別展に移動していたので驚いた。その後、ミイラなどを案内して慌ただしく退出し、徒歩で欧州最大の中華街を通過してナショナル・ギャラリーを訪れた。

ナショナル・ギャラリーでは、ダビンチ『岩窟の聖母』からスタートして、ドラローシュ『レディ・ジェーン・グレイの処刑』、ゴッホ『ひまわり』などの代表的作品を駆け足で案内して午後のロンドン日本人学校訪問へと向かった。

4日目の2月11日（土）はロンドン学園最寄りの Slough 駅から鉄道で Paddington 駅まで移動した。駅構内には映画『パディントン』で有名になった「くまのパディントン」像があるので案内し、Paddington 駅から二階建てバスでビートルズのアルバム『アビー・ロード』ジャケットで世界的に有名となった横断歩道まで移動した。

世界で最も成功した音楽バンドといわれる4人組ビートルズによる曲は日本の小学校「外国語活動」や中学校英語でも教材として数多く利用されており、今回の参加者には小学校や中学校英語の教員志望 SM 3人も含まれていたのは是非、教材研究として見ておいて欲しかった場所の一つであった。

その後、地下鉄で Westminster 駅まで移動して下車し、ビッグベンとしても有名な国会議事堂、ウェストミンスター大聖堂を見学してからグループ別行動となった。

帝京ロンドン学園・乳井雅裕教諭はテムズ川からロンドン塔、グリニッジ天文台に移動する男性6人グループ、荒巻恵子教授は大英博物館参観希望女性1名グループ、私はミュージカル鑑賞女性3人、男性1名グループを担当した。

私は首相官邸「ダウニング10番地」、清教徒革命によってチャールズ1世が1649年に処刑された場所である「パンケティング・ハウス」、ナショナル・

ギャラリーを案内しながら、市内中心部ピカデリー・サカースにあるミュージカル『レ・ミゼラブル』、『オペラ座の怪人』劇場へと到着した。私自身、渡英当初はミュージカルにまったく興味関心がなかったのだが、偶然、『キャッツ』を鑑賞してミュージカルの持つ魅力、特に音楽に感動し、渡英の度に『レ・ミゼラブル』、『オペラ座の怪人』、『マンマミーア』などの作品を鑑賞してイギリスが誇る産業としてのエンターテインメントに感銘を受けてきた。

現在、日本でも STEAM (Science, Technology, Engineering Art, Mathematics) 教育、特に理系分野が重視されているが、イギリスが誇るべき音楽や美術など「Art」が持つ教育的価値も、「人生100年」においてとても重要な意味を持つのではないだろうか。岸田内閣は産業のデジタル化によって必要な産業分野の人材を増やすためのリスキリング (re-skilling、学び直し) 政策を提唱しているが、特に教師は「教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け」ることが求められている。

その意味からも本教職大学院が実施している海外学校教育実地研究は「今日の海外教育制度と学校教育事情を現地で学び、日本の教育実践の特徴と課題を明らかにする」だけではなく、特に SL の参加者には自分たちの家族や生徒にイギリス・ロンドンが持つ伝統や歴史の奥深さを伝えることによって、再び教師生活を送る上での静かなる起爆剤となって欲しい。また SM の参加者には、今後の長い教師生活を送る上で非常に重要な視点である「人権」「多様性」「寛容性」を意識する契機となってくれればと思う。

(魚山 秀介)

#### 4. 近年のイギリスにおける教育改革

1870年にイギリスでは初等教育法による最初の実地教育制度が導入された。一方、1872（明治5）年に我が国で学制発布により学校制度が創始した。日本とイギリスの学校教育のはじまりは、同時代にありながら、150年余りの歴史に、日本とイギリスの歩んできた方向はどうだったのだろうか。

本稿は、海外学校教育実地研究の渡英に先立ち、英国ケンブリッジ大学ピーター・ダッドリー博士へ



のインタビューをまとめたものである。博士は長らく教育行政に務め、オラシー教育の第一人者として日本の授業研究から英国のLESSNSTUDY研究の教育施策を打ち出した教育者である。インタビューは、2022 年 8 月 9 日ケンブリッジ大学において 90 分にわたり実施した。前半近年のイギリスの教育改革について、後半日本の授業研究をモデルにしたイギリスにおける LESSNSTUDY についてインタビューしたものである。本稿は文字起こしした記録を翻訳したものから一部をまとめたものである。

### (1) サッチャー政権（保守党）

1979 年マーガレット・サッチャー首相が誕生した。彼女は政治と経済の偉大な改革者であり、教育改革も推進した。そして、今ではほとんどの人がネオリベラル改革と呼んでいるものを多く導入した。1988 年、第三次政権での教育改革法は教育における大改革で、ナショナルカリキュラムの創始、すべての公立学校に教育予算、教員人事の裁量権が与えられた。また、7 歳、11 歳、14 歳、16 歳を対象にした全国規模の共通テストと評価制度を導入した。

1991 年に導入された追加政策として、学校に財政的なインセンティブを与えて、学校が地方自治体の管理下から離れ、教育省の直営になることを奨励した。教育省により学校は多くの資金が与えられ、ナショナルカリキュラムに準じなくてもよいが、共通テストへの参加をしなければならなかった。この全国共通テストは、学校は毎年、教師は 4 年ごとに評価されることになり、すべての教師が同意して実施に至っている。その結果、学校は 1 番の「優秀」、2 番の「良好」、3 番の「要改善」、4 番の「不適切」のいずれかに判定され、「不適切」な場合、Ofsted（以下、教育水準局）は介入する権限があり、教師はその指導を受け評価が与えられた。この成績はすべて公開され、教育水準局のウェブサイトに掲載されるため、教師は校長と同様に、教育水準局監査を恐れることになった。その結果、新しいこと、異なること、よりよいことをしようという試みの意欲が、いろいろな意味で剥奪されることになる。

1989 年から 1997 年までの間、私は学校を離れ、国立大学の教員として、学校が子供たちの成長を評価するためのアドバイザーティーチャーを務め

た。校長先生たちが考えていたのは、次年度予算と、雇用できる新任の教師がいるか否か、生徒を取り合いになることの懸念だった。生徒一人につき、£5000 の財源がつき、つまり、30 人のクラスがあれば、教師に支払う十分な財源は確保でき、成績のいい学校は勝者となる。成績のいい学校は人気があり、成功した学校とみなされる。そして、親も自分の子供をそこに通わせたい。かつての自治区による学校の管轄は撤廃され、学校は定員に余裕があればどこからでも子供たちを受け入れることができるようになった。つまり学校間の競争を生み、一方で学校は廃校に追いやられ、他方で学校は成長した。しかし、このような構造的・財政的な改革への変化は、新しいカリキュラムとともに、実際の教育水準の低下を招くことになった。

1995 年に 11 歳児を対象とした共通テストでは、80%が全国レベルに到達すると予想されていたが、結果、英語は 55%、数学では、49%しか全国レベルに達することができなかった。

### (2) ブレア政権（労働党）

1997 年保守党政権が倒れ、労働党トニー・ブレア政権が誕生した。彼は教育重視を打ち出し、「英国における重要な課題は三つある。それは教育、教育、そして教育である。」という有名なスピーチを行った。教育、教育、教育の 3 つを政府の優先課題とし、過去と現在のどの政府よりも教育に資金を投入する一方で、新自由主義的な改革の多くを維持していた。学校が独立した資金で運営されるという理念は維持され、ブレア政権でも実行された。彼は、学校を復活させ、学校分離を奨励していたが、再び議会の管理下に戻した。しかし、それでも学校はすべて別の事業であることに変わりはない。学校にはそれぞれ管理団体があり、子供たちのために競争し、国のカリキュラムを教えなければならない。

2022 年までに識字率 55%、算数 49% から 80% に引き上げることを目標設定し、そして実際、この目標は、2025 年までに達成しなければならない。これはヨーロッパで最大の学校改善政策で、学校と教師の報酬、教師の地位に対して大規模な投資を行った。教師は弁護士や医者と同様に重要な人材とみなされるようになり、最終的なステータスでも重要な

人材とみなされるようになった。そのため、古い学校をたくさん建て直しもした。

第二次労働党政権は、2005年から2011年までである。そこで、それまで小学校で学ぶのは、英語・数学だったのが、中学校に移り、科学だけでなく技術も学ぶようになり、さらに全国的なディレクター制度も導入された。全国に10人の教育長がいて、シニア・リージョナル・ディレクターと呼ばれる人たちである。私はそのうちの1人で、イングランド東部とイースト・ミッドランド地方を担当していた。この国の人口の約20%を占め、その目的は、学校の水準を上げ続け、落第を防ぐことだった。

一方で、私たちは地方議会と協力し、議会にはまだ役割があり、地方政府にもまだ役割があったため、もし、地元の市民が現状を好ましくないとせば、別の議会に投票するし、政策の変更も、トップダウンから地元レベルでの協力体制を構築することになった。私が担当した「Improvements Network Learning Communities」プログラムは、学校のコミュニティが集まって協力し、教育水準の向上や素行の改善など、あらゆる問題に取り組むことを奨励するものだった。また、独立した学校信託の試行も行い、校舎の建て替えをした。この校舎は、主に19世紀に建てられた小学校用と1940年代に建てられた中学校用のものだった。

2009年までに、初等数学の数学的水準は、文献研究によると、世界で最も改善された。つまり、ヨーロッパで最も高い水準になった。しかし、この結果は、私が言いたいことを如実に表していて、全体の効果の大きさは、数字に興味がある方ならわかるが0.55の効果にすぎず、それまでの最高が平均になっただけである。この改革が行われる前の数学の水準がいかに低かったかがよくわかるだろう。

### (3) キャメロン政権 (保守党・自由民主党連合)

2010年政権交代があり、連合立政権で保守党のデイヴィッド・キャメロンが首相になった。彼は、史上最も改革的な教育大臣の一人であるマイケル・ゴープを擁し、すべての学校を州の管理下に置くことを決定し、協議会を方程式から排除するために州の管理下に置くことを指示した。そこで、すべての学校がアカデミーを目指すようになった。また、こ

の政権は、議会に対するすべての公的セクターの資金を50%削減することを導入した。そのため、劇的な数で学校はアカデミーになった。

ナショナルカリキュラムを教える必要はなく、資格を持った教師を雇用する必要もない。そして、あらゆる種類の自由が与えられた。特に、教師によって教えられる子供たちには、多くの自由が与えられている。2020年までには、75%の中学校が地方自治体から脱退し、30%がアカデミーになった。小学校は30%である。以前と違うのは、カウンシル(自治体)の所有地からエデュケーション・トラストの所有地に移管されたことである。そして、これらのアカデミーが協力し合い、より大きなビジネスを形成することが奨励された。今ではほとんどのアカデミーが大きなビジネスになっている。

マルチ・アカデミー・トラストでは通常25から40の学校がある。以前は大学が行っていた教育研究費の90%が私的なトラストに委ねられ、その私的信託は、実験モデルを用いた教育研究にのみ資金を提供することになった。つまり、コントロールの介入で、探索的な研究は行われず、授業研究は大きな資金を必要としなかった。また、初任教員研修、教育、教員人事、法定責任は、地方自治体から取り上げられ、学校に委ねられた。

特定の学校はティーチング・スクールと呼ばれ、地元でトレーニングを委託する責任が与えられた。私が以前いた自治体では、240人の児童を抱える小学校がティーチング・スクールの責任校となった。ある晩、校長は教育省から、「あなたは今、ロンドンのカムデン区におけるすべての教育訓練を公正かつ集中的に委託する責任を負っており、大学での教員養成は奨励され、学校での訓練が奨励されている」ととんでもないメールを受け取った。

さて、少し話を戻すが、ネットワーク・ラーニング・コミュニティ・スキームが実施されていた頃、私はそのスキームを通じて、日本語の授業研究のパイロット研究のための資金の一部を調達した。そのパイロットの話はまた後ほどするが、最後に現在の状況について述べる。

2016年に、すべての学校を、2022年までに、政府の直接管理下に置くことを目的とした法案があった。しかし、その年にBrexit (EU 離脱) 投票があり、

ここで私は完全にティーチング・スクールを辞任し、選挙が行われたが、あまりに大きなマジョリティで勝てなかった。問題はあったが政府の方針に大きな変化があったわけではない。

COVID19 では、ロックダウンの際に、政府がコンピュータ・アルゴリズムを使って生徒の成績を予測しようとしたことが問題になった。それはひどいもので、生徒の以前の評価と、学校がどれだけ効果的であったかを考慮に入れたものだった。つまり、貧しい学校、貧しい地域、経済的に恵まれない地域にいる人は、このアルゴリズムではあまり良い成績を取れないということになり、全国から反発があり、政府は撤回した。しかし、今は新しい法案があって、学校はすべて正常に機能している。

新しい法案は、2030 年までにすべての学校をアカデミーにすることを目指している。つまり、労働党も左翼政府も右翼政府も、学校教育を地方レベルに委譲することを望んできたわけだが、その過程で非常に異なるやり方をしてきたという点で、過去 40 年間に起こったことには多くの継続性がある。興味深いことに、アカデミーの大規模な独立評価とカウンシルスクールの評価はいくつもの評価規準で行われている。しかし、学校の水準という点でアカデミーの優位性を見出したものはなく、むしろアカデミーを設立してカウンシル（自治区）に留まった学校の方が優れているとの結果が出ている。いずれにせよ、学校の成績は良くなっているというのも、これまでの教師教育のモデルは、教員研修のためのコースに参加することが基本だったからである。

#### (4) オラシー教育から授業研究への教育施策

私がこのプロジェクトを始めた 2002 年までに、人間がどのように学ぶかについて多くのことを学び、私たちは、学ぶことと同じくらい、参加することによって学ぶことがわかった。私たちは、他の手段で学ぶのと同じくらい、参加することによって学ぶ。私たちは、ヴィゴツキー研究により、思考と対話は相互に関連していることを知っている。もちろん、日本のリスニング教育法についても読んだが、日本には思考と対話の関係を理解する長い歴史がある。しかし、2002 年から 20 年間、1 回の授業で「あなたは優秀すぎる。あなたの授業はダメだ」と評価

され続けてきたため、教師は他の専門家を教室に入れることを恐れてしまったのである。多くの教師が職を失い、教師たちは恐怖を感じていた。教室に 2 人とか 3 人とか人が入るとするのは、彼らが思っている以上のことだった。夜も眠れない。私の姉がそうだった。だから、もし授業研究が発展するならば、イギリスで授業研究をしようとは私は考えた。もうひとつ、私たちが苦手だったのは、子供たちの声に耳を傾けることだった。私たちは、形成的評価、つまり学習のための評価への大きな動きがあることを理解していなかった。私がアドバイザーティーチャーになったのはこの頃だった。子供たちが一緒に何かに取り組んでいるときに話を聞けば、彼らがどのような概念を持っているかを知ることができ、彼らが学習できるような思考ができるように、どのようにして言語と概念を発達させるかを考えることができる。子供たちの共同作業で対話を聞くことで、私たちはヴィゴツキーの発達の近接領域しかないと理解することができる。もちろん、11 歳や 16 歳、14 歳の子供たちが受ける 7 歳児テストでも、そのような現象が起こっていた。そこでは私たちは、教室で対話をする機会を増やし、対話を通して学ぶ機会を作ろうとしていた。例えば、Bombshell（映画）のように、教師が子供たちの授業への発言を聞き、子供たちは自分の発言が授業に反映されていることを知ることができる、というようなものはなかった。だから私たちは、学習における話し言葉の効果的な使いかたという、教授法を導入することに興味をもった。そして、私たちはオラシー教育にこそ、それがあることがわかった。私たちは授業研究を導入し、オラシー教育を実践した。そのためには、教師がもっとやりたいと思うような、動機づけのある方法でなければならない。先生たちが怖がるようなものではない。また、専門性を高めるためには、対話や専門家集団を活用する必要があり、日々の授業の中の見慣れたものに課題を見出し授業研究をやりがいのあるものにしなければならない。（授業研究のインタビューに続く）

（荒巻 恵子）



## 【Horsenden Primary School】

### 特別な教育的ニーズとインクルーシブ教育

原田 真里江・山崎 陽香 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

小林 捺哉 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース)

#### 1. 学校基本情報

学校名 : Horsenden Primary School  
電話番号 : 020-8422-5985  
電子メール : admin@horsenden.ealing.sch.uk  
所在地 : Horsenden Lane North, Greenford, Middlesex, UB6 0PB

子供の年齢 : 就学前教育 (3歳～4歳)  
レセプション (4歳～5歳)  
初等教育 (5歳～11歳)

子供の実態 : ホーセンデン小学校は、ロンドンのイーリング自治区の緑豊かなエリアにある (写真1)。平均よりも大きな小学校である。EUの離脱やコロナの影響を受け、子供の数は減少傾向であるが、特別な教育的ニーズを必要とする子供の数は増加傾向にある。また、ポーランドとインド出身の子供が大半を占めている。特別支援教育だけでなく、こうした家庭環境の文化の違いなど、幅広く個々のニーズに対応した包括的な学校である。ホーセンデン小学校は、子供の実態に合わせてカリキュラムを作成しており、全ての子供を歓迎する環境づくりに努めている。



写真1 ホーセンデン小学校の正面玄関

学校の環境 : プール、音楽室、PC室、給食室がある。  
教室では、電子黒板が使用されている。  
また、読書コーナーが点在し、子供たちの豊かな読書活動を支えている (写真2)。



写真2 読書エリア

通学的手段 : 徒歩、自転車、車で通学することが奨励されており、保護者は必ず登下校に付き添う。駐輪場が整備されており、登下校時刻には、多くの自動車が入りをする。

時間外ケア : ラウンドアップケア (Wraparound care before and after school) : (以下、早朝クラブ、放課後クラブ) では、授業開始前と放課後の支援を行っている。早朝クラブは、午前7時30分から授業開始まで、放課後クラブは、午後6時まで学校内で運営されている。早朝クラブは、朝食 (シリアル、フルーツ、ベーグル、トーストなど) が提供され、放課後クラブでは、軽食 (果物、野菜、ディップ、サンドイッチなど) が提供される。また、クラブ活動組織がある。クラブ活動には、テニスやサッカー、バンチボール、美術、工作などから選択することができる。

## 2. 学校の特徴

### (1) 個を尊重したインクルーシブ教育

Special Educational Needs and Inclusion（特別な教育的ニーズとインクルージョン）の考えとして、全ての子供の「個」を尊重しており、子供一人一人の学習ペースが異なることを意識し、日々の教育を行っている。個別に学習できるスペースが校内に用意されているのもその象徴だろう（写真3）。また、家庭学習の支援も個に応じた支援を行っており、家庭学習に取り組めない子供に対しては、原因を分析して学校から必要な支援をする。全ての子供たちが、学びの過程でつまづくことがあるという認識のもと教育活動を行っており、特別な教育的ニーズや障害がある子供たちを含む全ての子供たちに、幅広くバランスの取れたカリキュラムを提供することを目標にしている。

学校として、子供のニーズを早期に特定することに重点を置き、全ての子供が個別最適化されたカリキュラムを受けるために、最適な機会を見極めている。全ての教師が、SEND（Special Educational Needs and Disability）の子供の学習と開発に携わり、SENDを含む全ての子供をサポートするため、SENCO（SEN コーディネーター）や AHT（Assistant Headteacher for Inclusion）中心とした教師への校内研修体制もできている。期待した成果が得られない場合、または追加のニーズがあると特定された場合、クラス担当の教師または SENCO が保護者と話し合いを行う。また、EHCP（教育、健康、ケアプラン）という個別支援プランの体制も興味深い。EHCP をもつ子供のためには、学校に資金が提供され、行政がニーズを必要とする子供を支援する体制ができている。

子供への支援を進めていく上で、保護者との共通理解を図ることに難しさを感じることは、日本と同様である。保護者の同意がなかなか得られない場合には、学校だけでなく、学校心理士、言語聴覚士、作業療法士などの外部機関の人とつなぎ、専門的な視点から意見を伝えているという。EHCP をもつ子供に対しては、EHCCO（EHC コーディネーター）が、保護者との共通理解を図るための中心的な役割を担っている。全ての子供に個別最適化された質の高い教育を提供するために、子供を中心として、学

校だけでなく、どの機関のどの人につなぐべきかが明確になっていた。



写真3 学習スペース

### (2) 特色を生かしたカリキュラム

カリキュラムの中心はオラシー教育である。オラシーとは、話す言葉を通じて考えを明確にし、理解を深め、他の人と関わる能力である。日本では、話す前に「書く」ことが多いが、ホーセンデン小学校では、全ての科目で「話す」ことに重点を置き、子供は教員や仲間との対話を通して、概念、知識、アイデア、意見について繰り返し深く考え、話し合うことができるようにしている。それは、ここへ通う子供たちが、英語以外の言語を母国語としていることが多いという背景があるからだ。見学した授業でも、教員は、単語を表した絵が描かれている掲示物を指し、子供は体を動かしながら発音練習する学習活動が行われていた。明るく、温かな雰囲気での学習していた。これらは、多様な背景をもつ子供たちが、第二言語としての英語を正しく習得させるための工夫である（写真4）。



写真4 言葉のイメージング



学校全体で行う Curriculum Enrichment (カリキュラム強化) の日は、子供がテーマについてより深く探究する。特に、学校や地域の特色を生かしたテーマを設定することが多く、地域や文化について学ぶ機会となる。これにより、子供は日常の授業とは異なる創造的な活動や課題に没頭しながら、新たなスキルを身に付けることができる。これは、Ofsted で定められている SMSC (Spiritually Morally Socially and Culturally) の枠組みの中で、子供達がクラス、学年を越えて様々な人と関わりながら、成長に重要なライフスキルである一連の社会的スキルの強化や発達につながっている。

### 3. 学校の様子

学校見学の際、セキュリティの面で日本との違いに気付いた。日本では学校外から校庭の様子が見られるがホーセンデン小学校ではゲートを通りレセプションから校内に入らなくては校内の様子を見ることができなかった (写真5)。



写真5 校内の様子

ホーセンデン小学校ではセラピードッグが在籍している。セラピードッグはイギリスの学校の10%程度が導入している。セラピードッグが個別の児童と一緒に活動している所を見学することもできた (写真6)。



写真6 セラピードッグ

### 4. 学校訪問から得たこと

今回の学校訪問でホーセンデン小学校の校長先生から、日本にいと聞くことのできない話や土地柄を感じる話を聞くことが出来た。例えばポーランドや南アフリカでは教員免許を持っているがイギリスの教員免許は持っていないため、教員として採用できない人材がいる。その人材を育成し、いずれ教員として採用することで学校運営の向上を目指している。現在、その人材は教員免許を持たないサポーターとして学校に貢献している。

学校訪問でホーセンデン小学校を訪れた日が、Fat Thursday (脂の木曜日) というイベントの日であった。Fat Thursday はキリスト教における四旬節と関係した行事で、ポーランドでは国民食のポンチキという揚げドーナツを食べるという<sup>1)</sup>。このイベントはポーランドの行事であるがホーセンデン小学校ではポーランドにルーツをもつ児童が多く在籍しているため行っているという。

実際の個別の指導について保護者の理解が得られないことはあるのかという質問をした。保護者の理解が得られないことは多くあるとの回答であった。しかしそこからすり合わせるときに学校と保護者の間に専門家が入るといふ。日本では学校側が基本的にはすべての提案をするがイギリスでは行政が専門家を交えてくれるという。日本と比べて、学校はあくまで児童を預かる場所であるものとして責任の所在がはっきりしていた。

実際の授業風景を観察したときに多様な児童がいることが当たり前であった。日本とは違い、個々の机ではなく様々な形の机に児童が座っていたため教室全体が柔和な雰囲気包まれていた。そのような環境が整っていた。型にはめるのではなく、児童がそれぞれの最適解を探しながら伸びていく姿を想像した。今回の訪問調査を経て、個々の児童の学びが違うという考えに立って児童を見つめなおすことが必要であると実感した。

- 1) 「脂の木曜日」に食べるもの…、日本人の知らないポーランドグルメ7選. 朝日新聞. 2019-09-05, 朝日新聞デジタル. <https://www.asahi.com/and/article/20190905/300134111/> (参照 2023-02-17)

## 【Mandeville School】

### マンデビル特別支援学校

小林 沙友里・横井 路彦（帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース）

草野 有哉（帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース）

#### 1. 学校基本情報

学校名 : Mandeville School (写真 7)  
電話番号 : (020) 8864 4921  
電子メール : admin@mandeville.ealing.sch.uk  
所在地 : Horsenden Lane North Greenford  
UB6 0PA  
子供の年齢 : 2 歳～ 11 歳  
子供数 : 157 名 (定員 150 名)  
教員数 : 112 名  
ニーズへの対応 : 重度の知的障害及び重度・重複知的障害のある子供



写真 7 マンデビル特別支援学校の外観

#### 2. 学校目標

全体的な目標は、子供一人一人の個性を尊重する教育環境を提供することである。子供一人一人の複雑なニーズに柔軟に対応し、子供が成功できるように指導している。

- ・すべての子供が学習を楽しみ、その可能性を発揮できるようにする・
- ・幼児期の基礎段階、ナショナルカリキュラム、その他の関連カリキュラムに基づく、重度の学習障害や自閉症の子供のために、個々に合わせた学習を提供する
- ・子供がコミュニケーション能力、社会性、情緒性

を身につけ、有意義で充実した人間関係を築けるように支援する

- ・子供が自己価値と自尊心を育むことを支援する
- ・各子供が最もよく学ぶ方法に対応するさまざまな教育アプローチを提供することで、子供が学ぶのを支援する
- ・発達の、感覚的、治療的のアプローチを含むカリキュラムを提供する
- ・子供の人生を豊かにし、学習を延ばす拡張された学校の機会を提供する

#### 3. スタッフチームの構成

マンデビル特別支援学校は、非常に献身的で訓練されたスタッフチームがある。教諭、保育士、補助教諭によって学級担任は構成されている。

(1) セラピーチーム : 言語聴覚士、作業療法士、理学療法士、臨床心理学者を含む治療チームであり、専門家のアドバイス、情報提供によって業務をサポートしている。また、毎週「Ealing Music Therapy Project」の音楽療法士が学校を訪れ、個人や少人数の子供に実施している。

(2) 医療チーム : 2 人のフルタイムの学校看護師と 2 人の医療アシスタントがおり、すべての子供のケアと医療ニーズに対応している。各学級担任には、小児科の応急処置の訓練を受けた職員が少なくとも 1 人おり、職場での応急処置の訓練を受けた職員も多くいる。一部の子供には、教室での医療ニーズをサポートするための 1 対 1 のヘルスケアアシスタントがいる。

(3) Social Worker (以下 SW する) : フルタイムの SW は学校に拠点を置いている。重度の障害を持つ子供の世話をすることは、家族に多くの負担をかける可能性がある。SW は、福利厚生、住宅問題、レスパイト（休息ケア）など、さまざまな問題につ

いてアドバイスやサポートを提供することができる。

#### 4. 学校の特徴

##### (1) マンデビル特別支援学校の取り組み

学校全体での取り組みでは、子供たちや保護者、学校スタッフ、学校全体のコミュニティーと協力し、発展や改善を組織的に行うための基盤を提供している。そこから、発展や改善が体系的に組み込まれている。マンデビルカリキュラムは発展的で、生活に必要なスキルの習得に重点を置き、子供一人一人は自分の能力レベルに合わせてマンデビルカリキュラムを利用し、サポートされながら、それぞれのペースで学習することで、非常によりよい進歩を遂げることができる。マンデビルカリキュラムの内容は以下の5つを中心に行っている。

- ・コミュニケーションと言語
- ・数学と認知
- ・読み書き
- ・個人の社会性、情緒性の発達
- ・身体の成長に関わる発達

これらの内容は「0歳から25歳までのSEND実施基準 (Special educational needs and disability code of practice:0 to 25 years : 以下SEND実施基準)」をもとに考えられている。

##### (2) 「マンデビルカリキュラム」

マンデビル特別支援学校は、「評価 (Assessment)、計画 (Plan)、取組 (Do)、振り返り (Review)」をもと、教育と学習のあらゆる面を実施・評価を行っている。これにより、子供の発達の全領域において、その潜在能力を最大限に引き出すことができる。

取り組みとして、スタート地点から子供の個々の発達年齢を測定している。上達を目指す中で、スキルを身につけること、そしてそのスキルを様々な場面で一般化し応用することを目的とし、子供たちが学習面だけでなく、態度、情動の発達、自信、自尊心など、一人一人の個人的な成長を目指している。子供が知識と理解を深め、より多くの機会と経験を得ることで、発達が促されていく。

##### ① 評価 (Assessment)

記録と評価は切り離して考えることはできず、

教育の不可欠な要素である。評価は、継続的な計画と見直しのプロセスであり、指導に反映されていく。「マンデビルカリキュラム」は、子供の評価の基礎となる SEND 実施基準に概説されている「(特別な教育) ニーズとサポートの4つの広範な分野」を参照している。

##### ② 計画 (Plan)

マンデビル特別支援学校は、SEND 実施基準のすべての側面を遵守している。この基準では、すべての子供が幅広くバランスのとれたカリキュラムを利用できるようにすることを目的としている。教師はすべての子供に対して、困難さを感じる部分があれば、それを克服するために、適切な評価を行い、意図的に高い目標を設定していく。授業は、潜在的な困難の領域に対処し、子供の達成を妨げる障害を取り除くように計画されている。

##### ③ 取り組み (Do)

マンデビルカリキュラムは発展的で、子供はそれぞれ異なった方法で、生活に必要なスキルの習得に重点を置いている。子供一人一人は、自分の能力レベルに合わせてマンデビルカリキュラムを利用している。支援を受けながら、それぞれのペースで学習することで、非常によりよい成長を遂げることができる。

##### ④ 振り返り (Review)

指導と学習の観察・評価は、公式・非公式な指導と学習の観察、管理職や中堅教諭等による巡回を通して行われる。学期ごとに、子供の学習についての話し合いが行われている。正式な子供の学習会議は、教員と管理職や中堅教諭等のメンバーで行われる。定期的に、教員間で子供の学習に関わる話し合いが意図的・計画的に行われている。

#### 5. 現地での調査の様子

##### (1) マンデビル特別支援学校の教育体制

112名の教員と「キッチンスタッフ」「医療スタッフ」などを含め約150名の職員で特別な支援を必要とする子供たちのケアを行っている。基本的には、子供2名に対して教員1名、子供8名に対して教員3名で教育を行う。子供1名に対して教員1名で対応することもある。言語聴覚士、作業療法士と共に、「マンデビルカリキュラム」を作成している。



## (2) 特別な部屋

様々な特性に応じ、適切な支援を行うために、特別な部屋が多くあった。写真8の「Play Room」は、気持ちを落ち着かせるための部屋である。悲しい気持ちになったときに入り、トランポリンで弾んだり、柔らかい素材の遊具で遊んだりする。プロジェクターが設置してあり、気持ちを落ち着かせることができる。



写真8 Play Roomの様子

写真9の「Seahorse Class」は、癲癇や感覚過敏な子供が、バランスボールやトランポリンを使ってコミュニケーションをとる手立てとしていた。自力での移動が難しい子供のために、リフトが設置され、移動の手助けとなっている。



写真9 Seahorse Classの様子

写真10の「Occupational Therapy」は、作業療法が行われている。身体にクッションやロールを使って加重し、リラックスすることができる。



写真10 Occupational Therapyの様子

どの部屋にも表示には凹凸があり、点字で部屋の名前が示されている。

## (3) コミュニティーを重視

特別な支援を要する子供や親は、疎外された気持ちになることもあるという。だからこそ、コミュニティーを大切にし、全員で教育に携わっていることが伺えた。保護者がマンデビル特別支援学校で働くこともあるという。教育に関わる全ての人たちが、協力してコミュニティーを重視していることが分かった。

### [参考文献]

- 1) マンデビル特別支援学校ホームページ、最終閲覧令和4年12月16日  
「<https://www.mandeville.ealing.sch.uk/page/?-title=Contact+Us&pid=125>」
- 2) SEND 実施基準 (Special educational needs and disability code of practice:0 to 25 years)  
「[https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment\\_data/file/398815/SEND\\_Code\\_of\\_Practice\\_January\\_2015.pdf](https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/398815/SEND_Code_of_Practice_January_2015.pdf)」

# 【The Japanese School In London】

## イギリスの日本人学校

中島 武・竹原 由美子 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

米山 幸汰 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース)

### 1 学校基本情報

学校名 : The Japanese School in London  
(ロンドン日本人学校)

電話番号 : + 44- (0) 20-8993-7145

FAX : + 44- (0) 20-8993-7145

Eメール : ron-nichi@thejapaneseschool.ltd.uk

所在地 : 87 CREFFIELD ROAD, ACTION  
LONDON, W3 9PU, U.K.

子供の数 : 282名

教員数 : 35名

クラス数 : 小学部 6学年 2クラス

中学部 中学1年 1クラス

中学2・3年 2クラス



写真11 ロンドン日本人学校

### 2 学校経営

#### (1) 学校経営の基本方針

ロンドン日本人学校(写真11)は、文部科学省が認定した在外教育施設であり学習指導要領に則った教育活動を行う。また、英国教育省から認定を受けた私立学校であり、英国教育省制定の私立学校基準「Independent School Standard」に従い、英国教育水準Ofstedによる監査を受ける必要がある。

日本人学校有限会社により設置され、学校運営委員会が実務的な運営を担っている。

教職員は、都道府県から派遣された派遣教員とイギリスで採用された現地採用教員、英国人の英会話講師、事務局職員等で構成されている。校長は、理事会、学校運営委員会の構成員である。学校長：佐藤 雅彦

#### (2) 学校教育目標

自ら学び、心豊かにたくましく国際社会を生きぬく児童生徒の育成を目指し、合言葉として、自立、貢献、気品を掲げている。

**自立：**自立とは、自分の力でやっていくことである。考え判断し、選択する責任ある決定と行動をすること、その過程を人任せにしないことを意味している。

**貢献：**貢献とは、他の誰か・何かのために力を発揮することである。このことがやがては自分自身の力を高め、周りの人々との関係(=人生)を豊かにすると考えている。

**気品：**気品とは、自分と違う価値観や概念を持っている人の考えを想像し、場に応じた礼儀正しさや凛とした姿、凛とした声で真向かうことである。進展する国際社会において必要不可欠な他者を思いやる心を持ち、しなやかな言動によって、自らも他者も、そして所属する集団をも高めようとする資質・能力を培う。

### 3 ロンドン日本人学校の沿革

昭和51(1976)年6月、ロンドン日本クラブ会員日経企業運営による「日本人学校有限会社」の全日制義務教育学校として設立され、同年10月に「日本クラブ校舎」「大使館広報センター校舎」として開校した。

昭和62(1987)年3月、アクトン校舎に移転し、現校舎は、ハバーダッシュャーズ・アスクス・スクール女子校として明治33(1990)年に建てられたものを利用している。築122年のため老朽化に伴う補修を進める。

#### 4 令和4年度の年間教育計画

- 年度当初の授業参観・懇談会・保護者面談：コロナ禍以前の通常通りに行われる。
- 自然体験教室（小学5年生）：6月17日～6月19日 PGL Liddington にて2泊3日で実施
- 運動会：7月9日 Allianz Stadium (StoneX Stadium) にて実施 ※保護者公開
- 修学旅行（小学6年生）：6月22日～24日 ウェールズ・北アイルランド 2泊3日で実施
- 修学旅行（中学2年）：6月7日～10日 スコットランド 3泊4日で実施
- 文化祭：10月1日 ※保護者公開
- 現地校交流：11月24日 スパニッシュ校 他
- 部活動：実施時期は、前期のみ。小学5年生以上の児童・生徒がバスケットボール部、フットボール部等に参加できる。

#### 5 特別支援教育

特別な支援を要する児童・生徒の受け入は、学校の規準に則り、教職員が検討し、学校長が決定する。令和4年度まで特別支援学級は、設置されていない。

#### 6 Ofsted（イギリスの教育水準局）

昨年度は、7月13日～15日の3日間、英国公的機関 Ofsted（英国教育水準局）による監査が実施された。以下が2021年9月時点での仮評価内容である。

教育の質	The quality of education: <b>Good</b>
児童生徒の行動と態度	Behaviour and attitudes: <b>Outstanding</b>
個人の発展	Personal development: <b>Good</b>
学校リーダーシップと管理	Leadership and management: <b>Requires improvement</b>
全体	Overall effectiveness: <b>Requires improvement</b>

ロンドン日本人学校は、英国における私立学校として認可されており、英国が定めた「Independent School Standards」に従う必要がある。

この監査は、教育活動が各評価項目の基準に適合しているか確認するものである。2018年10月に子どもの安全面の対応について指摘を受けたが、避難訓練や安全面に配慮した教育活動を計画・実施したことで改善された。その一つの例がPSHEの取組である。

#### 7 PSHE

- P : Personal (一人ひとり)
- S : Social (みんなとなかよく)
- H : Health (健康)
- E : Economic (幸せな世の中)

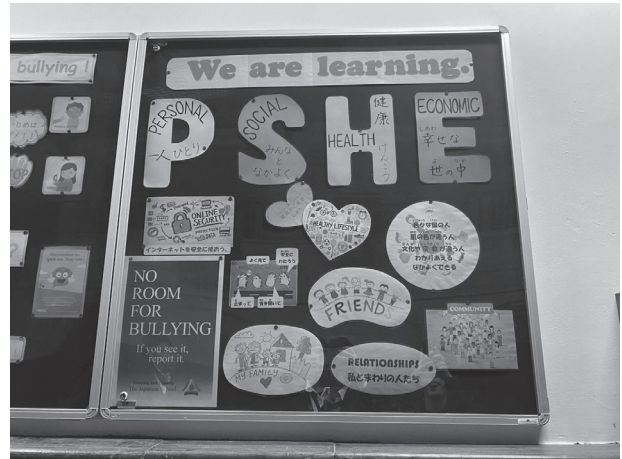


写真12 PSHE理念

英国の小学校では、「PSHE」（写真12）と呼ばれる子どもの社会的スキルを養う教科が義務化されている。ロンドン日本人学校でもこの「PSHE」をもとに各教科や学校行事等あらゆる教育活動で横断的なカリキュラムを組み、指導を行っている。英国は多民族国家である。現地校では異なる文化的背景や価値観を持つ児童生徒が共に学んでいる。児童生徒が一つの事柄において課題意識を持ち、自分自身と向き合い、考えさせることを重要視している。特に英国では、LGBTが差別を受け自殺した事件を受けて、LGBTに対する理解を進めようとする動きが広まっており、日本人学校でも「PSHE」においてLGBTに対する教育が行われている。

#### 8 外国語教育

文部科学省が定める外国語教育の学習内容に加え、独自の英語プログラムに取り組んでいる。授業は、習熟度別少人数指導を基本とし、1学級を4つのコースに分け、話す能力の向上に重点を置いている。また、教材は、日本と同じ教科書を活用したり、現地校が使用するテキストを活用したりし、児童生徒の実態や授業展開により併用されている。（写真13）

生徒の中には、英語検定1級レベルの生徒がおり、優れた英語力をもつ生徒が多数在籍している。



○小学校英語教育：週3時間各学年習熟度別少人数制授業

○中学校英語教育：週6時間高等学校、大学へつながるハイレベルな授業展開



写真13 英会話を行う教室

## 9 学校内の施設・設備

### (1) 校舎内

日本の学校と同様、壁面には、調べ学習の資料や総合的な学習の時間や各教科で作成された模造紙新聞が掲示され、児童・生徒一人ひとりの豊かな想像力や表現力を垣間見ることができた。(写真14)



写真14 廊下の掲示物

### (2) 図書館

本校舎とは離れた位置に設置され、現地採用の司書教諭が配置されている。日本の本や英国の本も豊富に備えられていた。1階と2階があり、2階には絨毯が敷かれ、ゆったりと読書活動を楽しむ雰囲気づくりがなされていた。見学時は、調べ学習のため、児童が図書館を活用している様子が垣間見られた。(写真15)



写真15 図書館

## 10 学校の課題

昨年度と比較すると若干増加しているが、年々減少傾向にある。コロナ禍により、渡航が制限されたことや保護者の考え方が多様化し、現地校やインターナショナルスクールを選択すること増えたことが要因として挙げられた。一方、中学3年生は多くの生徒が帰国後、日本の高等学校を受験している。そのため、現地校を選択するのは、少数である。日本の受験システムに対応するため進路情報の精査や生徒一人ひとりの希望や特徴を理解した進路指導が求められている。

## 11 まとめ

文部科学省により認可された在外教育施設と英国教育省により認可された私立学校という2面性をもつことから、日本の学習指導要領に準じた教育課程が基本であるが、英国のOfstedに準じた教育を実践しなければ認可が取り消されることもあり、学校運営の難しさが感じとれた。そのための対策として、Ofstedの評価項目を細分化し、教育課程にあてはめた教育実践が考えられていた。インタビューした管理職や教員からは、ロンドン日本人学校に誇りを持ち、教育活動に取り組む言動が見られ、学校管理職のリーダーシップのもと教職員の協働的な組織運営がなされていることを実感することができた。

### 【参考・引用文献】

ロンドン日本人学校 学校便り

<http://www.thejapaneseschool.ltd.uk/nihonjingakko>  
令和4年度ロンドン日本人学校学校要覧  
[d0761eae25c5f69e7696b3b4552d141bad1756b0.pdf](http://d0761eae25c5f69e7696b3b4552d141bad1756b0.pdf)  
([u-gakugei.ac.jp](http://u-gakugei.ac.jp))

## 日本人としてのアイデンティティの育成

小林 沙友里

ロンドン日本人学校では、日本の教育を途切れさせないことを理念として、日本のよさを大切にしている様子を見学した。

——「小林先生」と声をかけられ、少女が駆け寄ってきた。見覚えのある顔が目の前に表れ、数秒してから、その少女が前任校での教え子であることに気が付いた。「りなちゃんだね。」と声をかけたら、彼女の目から大粒の涙がぽろぽろと流れ落ちた。その姿に驚きつつ「大丈夫？泣かないで。会えてうれしいよ。」と、声を掛けて互いに再会を喜び合った。彼女の流した涙は、懐かしい担任の先生に再会した「うれし涙」であると思いたいが、そんな単純なことではないだろう。彼女の涙の背景に、どのような思いがあるのだろうか。

彼女の担任と話す機会があり、ロンドン日本人学校では、彼女は楽しく過ごしていることを聞いた。しかし、校外へ出たら、日本語は通じず、不慣れなロンドンの生活があるだろう。彼女を迎えに来た母親の話によると、約1年前にロンドンに来て、現在は、2年目の海外生活であるという。1年以上の日本を離れている彼女は、海外の生活をどのように感じているのだろうか。突然目の前に現れた私におそらく、彼女は日本を感じて、安堵の涙を流したのではないだろうか。——

グローバル化の進展に伴い、2017年に小学校高学年に外国語科、中学年には外国語活動が導入された。教育活動では、世界で活躍できるグローバル人材を初等中等教育段階から育成することを目指し、異文化体験や国際交流を通じて、多様な価値観に触れる機会も増えた。私自身、学級担任をしていて外国籍の子が学級に在籍することも増えた。海外で生きる子供たちにとって、心のよりどころとなる場所は、現在、生活している場所なのだろうか。それとも生まれ育った郷土なのだろうか。

生まれ育った郷土は、その後の人生を送る上で心のよりどころとなり、生きる上での大きな精神的な支えとなる。その大きな精神的支えがあるからこそ、多様な価値観に触れ、そのよさを感じるのだろう。言い換えれば、生きる上での大きな精神的な支えの上にグローバル化が成り立つと考えられる。生まれ育った郷土を大切に思う心、この心こそが帰属意識（アイデンティティ）で、グローバル化とアイデンティティの育成は密接な関係にある。

## 『ロゼッタ・ストーン』は誰のもの？

竹原 由美子

英国はビクトリア女王時代には市場を求めて植民地支配を拡大し、多くの文化的価値のある品々を自国のものにしてきた大いなる歴史がある。大英帝国の象徴とも言える『ロゼッタ・ストーン』がその一つである。『ロゼッタ・ストーン』は1801年、アレキサンドリアの戦いでナポレオン率いる仏軍から英国軍が奪ったものである。今回の研修での私の目的の一つが、『ロゼッタ・ストーン』を見ることだった。社会科の歴史の教科書にも記載されており、どうしても本物を見たいと思ったからである。

——迷いなく Ticket 売り場へ行き、「I'd like to see Rosetta Stone」しかし、スタッフから「Sorry, tickets sold out」いい慣れた一言が返ってきた。私は、結局見る事ができなかった。——

現在、英国を含め西欧諸国が植民地支配の過程において奪った文化的価値のある品々を元の国々へ返還する動きが高まっている。『ロゼッタ・ストーン』も「略奪文化財」として呼ばれており、エジプトが英国に対して返還を要求している。仏軍がエジプトから持ち出した『ロゼッタ・ストーン』は当時のエジプトにとって価値づけされていない、ただの岩にすぎなかった。しかし、『ロゼッタ・ストーン』に書かれた文字がエジプトのヒエログリフを解読する鍵となり、歴史的価値のある文化財となったことで、ただの岩が岩でなくなった。エジプトの著名な考古学者ザヒ・ハワス氏は「ロゼッタ・ストーンはエジプト人の象徴だ」と述べている。これまで、英国は文化財保護のために多額の資金を投じてきた。はたして、エジプトで発見されたものはすべてエジプトのものなのだろうか。多くの文化的価値ある品々が保管されている大英博物館、英国は西欧諸国の返還への動きに同調するだろうか。

EUを離脱以降インフレ率の上昇、労働力不足などの経済状況の悪化によって、英国は大英帝国時代に手に入れた歴史的文化的な品々を売却していくかもしれない。私が次に英国に行くまで、『ロゼッタ・ストーン』は大英博物館にあるだろうか。



## 英国と日本の世界基準の違いを感じて

中島 武

私の本実地研究に参加した目的は、2つある。

第一に英国教育を肌で感じることだ。事前研究では、明治初期に、後の初代内閣総理大臣伊藤博文や井上馨など我が国の礎を築いた人物が英国に留学し、開国論者となったことや、伊藤内閣のもとで初代文部大臣に就任した、森有礼も英国留学を経験し、東京高等師範学校（※現在の筑波大学）を「教育の総本山」として改革を行ったことなどの講義を受けた。このことから、日本の教育制度のはじまりは、英国教育を模範として創られていることを理解した。

実地研究では、英国の学校として、ホーセンデン小学校とマンデビル特別支援学校を訪問し、学校長へのインタビューや施設見学、授業参観を行った。ホーセンデン小学校では、学習支援のため児童を取り出し、ボランティアと1対1で補充学習を行う場面がみられた。外部人材（児童の家族やボランティア）を効果的に配置し、細やかな学習支援体制が整っていた。また、マンデビル特別支援学校では、ICT機器を活用し、動画サイトの映像を見せ、歌やダンスで児童の五感を刺激する授業を展開していた。英国のICT教育は、1999年からはじまり、プログラミングを通した児童の創造力の強化を図った。特別支援学校での活用が英国におけるICT教育の歴史の深さを実感できた。

第二に英国の日常生活を肌で感じることだ。コロナ禍により健康と安全対策が依然強い日本は、多数がマスクを着用するが、英国ではマスクの着用が皆無だった。また、歩行者の道路の横断のため、車が停止することがなく車優先の交通感覚が見られた。英国と日本では、伝統や教育制度が異なるが、他人種との共存による宗教や国民性の違いが一因となりこのような生活スタイルが確立されたと考えた。

英国での実地研究は、私自身の今後の教育や生活の在り方に大きく影響を及ぼした。ルールよりもマナーを重視した生活や集団よりも個人を重視した人権感覚に衝撃を受けたからだ。実地研究の学びを自分自身の見識に止めることなく、先人達のように他人に伝えることが責務と自覚した。

多様性を受け入れる準備段階の日本の未来は、教育にかかっていることを実感した実地研究だった。

## 型にとらわれない日本の教育へ

原田 真里江

世界と比較することで、日本の教育の一面が見えてくる。教育の卓越性と公正性の2軸を表したOECD調査結果からは、人口が1億人を超えるような大国である日本が、教育において、平均さを維持しつつ、公平さを保っていることが示され、世界からも評価されている点の一つでもある(桐生 2023)。

研修では、日本人学校を訪問し、授業見学をした。レンガ造りのイギリスの街に溶け込んだ校舎の外観とは対照的に、教室の中には日本の授業風景そのものがあつた。子供たちは、姿勢よく椅子に座り、先生の方に体を向けて静かに話を聞く。意見がある時には、まっすぐ手を挙げる。学習内容だけでなく、授業規律も全て含めた日本の教育が、世界のどこでも受けられることに感心した。OECDに評価されている日本の卓越性と公正性は、まさに「学習指導要領」による明確な教育課程の基準と日本人としての誇りによって、国を越えても保障されていることを実感した。また、日本の教育の可能性も見えてきた。音楽の授業では、5年生の子供たちが、6年生を送る会での出し物を見せてくれた。みんなで同じ動きをしながら、歌を歌った。日本では当たり前の光景である。私自身も今まで同じような取組を行い、同じような指導をしてきたはずであるのに、その光景に違和感と恐ろしさを覚えた。日本の教育が、一つの型にはめようとしているのではないかという恐ろしさである。英国の現地校の小学校は、電子黒板の前に子供たちが座って授業を受けていた。先生の発話に、子供一人一人が反応していた。「姿勢よく」と言うよりも、自分の考えや思いを素直に表現し、緩やかで伸び伸びとした雰囲気だった。もし、歌の振付が決められたものではなく、子供一人一人が、曲から感じられるままに体を動かしていたらどうだろう。きっと、子供は心から「音楽」を楽しみ、感謝の気持ちを自分なりに表現しようとするのではないか。

評価される日本の教育。それを支える「学習指導要領」。しかし、その型だけを頼りにしては、日本の教育に限界が見えてくる。日本の教育の突破口となるのは、型にとらわれない教師の指導である。きっとそこには、教育の質を高める可能性が見えてくるだろう。



## 多様性を認め合う社会をつくるために

山崎 陽香

イギリスは移民の国、様々な文化的背景をもつ人々が集まる多様性が大きい国である。ホーセンデン小学校があるイーリング地区は、イングランドとウェールズの中でも 3 番目に民族の多様性が大きい。現地で社会や文化に触れながら学校教育を見て日本の教育と比較すると、多様性を認め合うための教育を行っていることが分かる。

ホーセンデン小学校を訪問した際に聴いた、「話す」ことに重点を置いた教育は、多様性が大きいイーリング地区の子供の実態を生かした教育である。日本で行われている話す前に「書く」教育と大きな違いを感じたが、英語を第二言語として学ぶ子供が多い、というこの学校の実態を聴き、納得した。カリキュラムの特色の一つである、オラシー教育は、言語によるギャップを埋め、すべての子供が質の高い学びを平等に行うために、多くの移民がいるイギリスという国のインクルーシブ教育の一つなのだと考える。これは、移民の多い社会、多様な文化が生んだイギリスの教育の強みだろう。見学した授業のように体でも表現しながら楽しみながら授業を行うことは、話しやすい雰囲気づくりの一つであり、自分を相手に開示して、表現することへの抵抗感をなくすことでもあると感じた。また、書くという内言よりも、話すという外言を重視していることで、人間関係の構築に必要なコミュニケーション能力や、相手に伝えるための豊かな表現力も身につくと考えられる。

今後グローバル化が加速していく中で、多様な文化や価値観を背景とする人と、協働しながらよりよい社会を作っていく資質・能力の育成が求められている。その上で、多様性を尊重するイギリスの教育は興味深い。国という境界を越えて、社会や文化にとらわれず、未来を担う子供を育てる同じ教育者として、様々な国の教育を知る必要性を強く感じた。

## 特別支援学校教員の日本とイギリスの比較

横井 路彦

マンデビル特別支援学校を視察した時、最初に笑顔で暖かく出迎えてくれた職員の皆様の表情から、快く見学を受け入れたことに感銘を受けた。デニス・フィジー校長先生の「私たちは仕事を楽しんでいる」という言葉は、障害のある子供と授業を行っている教職員の姿を証明していた。子供はもちろんだが、教職員が楽しく授業を行うことは、日本と変わりはない。全ての職員が笑顔で挨拶する姿はとても印象に残った。

日本と大きく違うのは、授業を行う集団の作り方である。学級担任の構成は、教員 1 名と補助教員で構成されている。補助教員には、保育士や理学療法士、作業療法士なども含まれており、個々の教育的ニーズに合わせた構成になっていた。また、障害の状態に応じて、人数配置を検討し、身体的に重度な子供の学級よりも、知的障害や自閉症学級に多くの教職員を配置している。日本では、身体的に重度の学級により教職員を配置し、知的障害や自閉症学級には少ない教員配置になっている。イギリスでは個々の状態に応じた臨機応変な対応をしている印象を受けた。そして、コミュニティを大切にしている。障害のある子供という点から阻害されてしまわないように、学校でコミュニティを作り、保護者が一緒に教育を行っている。中には、職員として一緒に働いている保護者もいると伺った。これらの点は、日本の学校では見られない光景である。これは、英国が進める「拡大学校（Extended School）」の政策の一つで、先導的かつ組織的に学校と保護者、地域との連携・協力に取り組んできているイギリスの取り組みである。

また、教員養成課程の違いでも、イギリスには特別支援学校教諭免許はなく、個々の教育的ニーズを理解し、障害特性に応じてどのような学習を行うか、学校現場で覚えていくことになる。マンデビル特別支援学校でも、補助教員から教員に育てていくことが求められている。

共通点は、障害のある子供の指導ができる教員の養成である。日本の教育現場でも、特別支援学校の教員養成や、特別な配慮が必要とする子供の指導について、専門的知識が求められている。障害のある子供の指導ができる、専門的知識をもった教員養成が両国に求められている喫緊の課題である。

## 生きた英語の習得に向けた取り組み

草野 有哉

ホーセンデン小学校のあるイーリング自治区では、企業の駐在員などの日本人が多く居住しており、日本人街が見られ、またアフリカ系やアジア、中東からの移住者が多い多様性のある地域である。また、現地の出身者と移住していき住居者の割合が同等である。そのためクラスの多くの子どもが、英語を第二言語として話す場合が多く、授業においても話すことに重点を置いた取り組みが行われていた。日本では、文法や単語を学び、そこから話すことに繋げていくことが多いが、現地の学校では、まず話すことから始まる。ある授業では、ランダムに単語を羅列させ、その中の単語を使い即興でストーリーを組み立てるものや、低学年では絵だけを見せ、体で絵を表現しながら覚えていくものがあった。絵と言葉を結びつけて覚えることは多くあるが、絵とボディアランゲージを結びつけた単語学習は初めてみて驚きがあった。日本においても外国籍や帰国子女の児童生徒が増えている中で、今回訪れた学校の取り組みを参考にしていきたいと考える。

日本人学校では、日本の教科書を用いながら、別にネイティブが担当する習熟度別の週6時間の授業が行われており、コミュニケーションに重点を置いた授業が行われていた。職業体験や現地校交流を通して異文化理解を深めながら英語を学ぶことができ、実際に英語を使う実感を児童生徒に持たせることができると感じた。

児童生徒自身が目的を持って学ぶことで、実生活に活かすことができ、主体性を持つことができ、学ぶ意欲につながる。そのために児童生徒、教員自身が英語を使うことで世界が広がり、言語を学ぶ楽しさを実感することが言語学習において重要なものであると感じた。私自身も生徒が関心を持つことができるような授業作りを行い生きた英語への習得につなげることができると思う。

## 読書の吉報と読みを深めた訪問

小林 捺哉

イギリスの現地校や日本人学校を見学したとき、私の使う言葉は「日本は」、「イギリスは」と言ったように訪問中、特にそのような主語で話をしていたことに後から気が付いた。しかし私は、一人の旅行者にすぎず厳選された良い部分を見たに過ぎない。たった数日でイギリスの大枠を語るようなことになってはいけない。

この前提に立ったうえで、今回見たもので感銘を受けたのはホーセンデン小学校で個別指導をしている方が絵本を読み聞かせしながら語彙の学習を進めていたところだ。私のまだ少ない経験と狭い見識の中では、英語の学習で読み聞かせを見たことがなかった。大学院では読書指導や本を使った指導を学んでいる。国語教育、文学に偏ってしまう読書や本の指導であるが、英語本での読み聞かせの場面は外国語活動の時間にも読書活動ができるという新しい発見だった。

イギリスの街並みは温故知新と表すのが適切だと感じた。栄えているのに息苦しくなかった。ここは良い街だと思った。イギリスが舞台の絵本『クマのパディントン』（マイケル・ボンド、2012）で、ペルーからやってきたパディントンが『ここはすごくいい町ですね』<sup>1)</sup>というシーンがある。日本からやってきた私がパディントンと重なった。これまでよりも深くこの絵本が読めるようになった。この絵本を読み聞かせするときに来たら今回の訪問の話をしようと思う。

1) マイケル・ボンド. クマのパディントン. 理論社, 2012,p.19

## 失敗ではなく、成功のための経験

米山 幸汰

今回、イギリスに行って一番感じたことは、児童生徒の「やりたい」「楽しみたい」「学びたい」を大切にしなければいけないということである。特に印象に残るのは、ホーセンデン小学校のエマ校長先生が「英語を学ぶときは、書くよりもまず話す」というお話である。日本の教育では書くことを先に行うことが多く、なぜ書くのか、なぜ学ぶのかが分からず、目的を見失ったまま児童生徒は取り組んでいるように見えることがある。しかし、ホーセンデン小学校の児童生徒は、身体を動かしたり、絵を描いて表したのから連想して言葉をくり返し発声したりすることで覚えている姿を見て、生活に結びついた児童自身のことばを使って参加しているように見えた。また、マンデビル特別支援学校では、児童が「やりたい」と思えるような動画や遊具の工夫があり、多くの児童が笑顔で学んでいる姿を見ることができた。ロンドン日本人学校においても、日本と同じ学習指導要領を基に行われている教育であっても児童が「楽しい」「知りたい」と思えるような工夫があり、小学校5年生が音楽で恥ずかしがりながらも全員が踊っていた。

私自身、失敗を恐れて挑戦することや試みることをためらってしまうことが多く、後になって後悔することが多くある。今回の海外学校教育実地研究を通して失敗を失敗と捉えるのか、成功のために経験と捉えるかで大きく変わってくることをイギリスの子どもたちの学びの姿を見て、肌で感じた。私自身の経験がどのように児童生徒にアプローチすると成功のための経験と捉えることができるか考えていきたい。

私は今後、授業等を行っていく中で今まで学んできた教授方法を参考にしつつ、自らの取り入れたいことや児童にとってスモールステップになるような工夫を考えることで、児童生徒の「やりたい」「学びたい」など今後必要となってくる主体的・対話的で深い学びを行うきっかけとなる児童の興味関心を促すことにつながると考える。そのために児童生徒自身が挑戦することにとめらわずに行動できるように児童生徒に失敗を失敗と捉えるのではなく成功のための経験であるということを自らの行動で示せるようになりたい。そのために、私は自らの資質能力の向上をめざす。

## リトリートな学びのジレンマと海外研修

町支 大祐

私自身は海外実習に参加するのは2 度目である。海外での教育の様子もさることながら、この活動を通して院生らにどのような学びが生じるか、という点に関心を持ってきた。

キーワードの一つは「リトリート」である。つまり、「非日常」における学びである。普段とは異なるものを見て新鮮であるからこそ気づくことがある一方で、普段とは異なる条件であるからこそ、自分の日常に落とし込みにくい、というジレンマもある。例えば、イギリスでこれまで見たことがない実践に出会って感銘を受けたとしても、それを日本でそのままやろうとしても条件が異なるのでやりにくい。

むしろ、非日常の場であるからこそその学びのカギはメタ認知にあるように思う。条件の違いを含めて俯瞰的にみたり、普段見ないものをみた時の自分自身を俯瞰的に見たりする中で、海外ではメタ認知が起きやすくなるように思う。

メタ認知を促すものの一つは、対話だろう。今回も、対話の中で過去の自分の経験について吐露し、その経験が研修での実践に対する自分の感じ方に影響しているのではないかと考える院生がいた。その瞬間、その院生はメタ認知を試みているように見えた。メタ認知を通じて自分に生じた気づきは、院生のその後の行動変容にもつながるのではないかと。

視点を変えることも重要であろう。海外からの視点で日本を見たりすることがヒントになるのではないかと。その意味で、今回、日本人学校を視察させていただいたことは大変意義深かったように思う。イギリスの文化にどっぷり浸かる中で、急に日本の学校文化に触れることになった。その瞬間に院生の視点は様々に変化しているように見えた。日本で感じる日本らしさと、イギリスで感じる日本らしさとの間で、様々に考えることがあったようだ。その瞬間にもメタ認知が生じていたように思う。

こうしたことを通じて、非常に学びの大きい一週間だったと感じている。



## お金の問題なのか。

杉山 正宏

今回訪問した現地校と日本人学校、3校ともに我々が到着して最初に行ったこと。それは、校門(ゲート、扉)を開けてもらうことであった。学校の様子が見えるフェンスとゲート、中が見え難い塀と扉、学校によって形態は異なっていたが、校地に入るためには、その境界を越すために、鍵を遠隔操作で開けてもらうか、職員に来てもらい開けてもらうしか方法は無い。

2001年6月に大阪教育大学附属池田小学校で起きた事件は、刃物を持った男が校地外から校門を通過して校地に入り、校舎内に侵入し、児童や職員を殺傷したものである。8人の低学年児童が亡くなり、15人の児童・職員が傷を負った。犯人は校門から殺傷現場の校舎内までの約100mを何の障壁もなく進んでいる。

この事件により、安全だと思われていた場所、安全でなければならない場所「学校」がそうではなかったことが明らかになった。この事件後、施設設備等のハード面、職員の危機管理や防犯対策への意識等ソフト面での実態調査がされ、その改善充実を図るための取組が学校設置者や学校現場に求められた。

それから20年以上の時間が経ち、身近な地域の学校の防犯対策はどのように変わったであろう。筆者が最後に勤務していた公立小学校では、勝手に分かっている物資納入業者や宅配業者、保護者は、車や徒歩で門まで来ると、自分で扉やゲートを開け、校地に入り、誰に咎められることなく校舎入口まで来ることができる。窓口の事務職員はインターホンが鳴った時点で初めて来校者が玄関まで来たことを知る。訪問者は校庭へは何の手続きをすることなくアクセスできる。

何もせず手をこまねいていたわけではない。これまでの勤務校全てで、毎年、校門のオートロック化と防犯カメラの設置を学校設置者に要望してきたが、防犯カメラが3年前に設置されただけである。なぜ要望が通らないのか。「予算が無いから」に他ならない。限られた予算の使途を考える中で防犯対策は後回しにされてきたのだ。イギリスには潤沢な教育予算があるのか。そうではないだろう。予算の

使途の観点や視点が我が国とは異なるのだろう。そうとしか考えられない。

わずかな訪問であったが、自動で閉まる校門を見て、安心安全な学校づくりについての彼我の違いに驚き、その考え方についてもっと知りたくなった。